

第1回アドバイザー委員会 開催結果

[日時] 平成18年11月28日(火) 9:30~13:00

[場所] 研究開発戦略センター2階大会議室

[出席者]

委員:

笠見委員、金澤委員、郷委員、合志委員、末松委員、遠山委員、堀田委員、山野井委員
JST/CRDS:

沖村理事長、北澤理事、永野理事、
生駒センター長、井村首席フェロー、田中上席フェロー、井上上席フェロー、
浅見上席フェロー、小川シニアフェロー、佐藤事務局長、他

事務局:

企画運営室

[議事次第]

1. 開会
2. 委員長選出
3. 議事(研究開発戦略センターの活動と成果について) []内は説明者
 - (1) センターの経営方針 [生駒]
 - (2) ファクトデータ [佐藤]
 - (3) 国の基本政策に反映されたイノベーション政策提言と戦略プロジェクトチームの今後の活動 [浅見]
 - (4) ICR(Integrative Celerity Research)の推進 [井村]
 - (5) 主な戦略プロポーザル等の内容、効果、具体化
 - ① IRT~ITとRTの融合~ [丹羽]
 - ② 元素戦略イニシアティブ [田中]
 - ③ システムバイオロジーの推進 [野田]
 - ④ アジアの発展シナリオと基盤技術 [井上]
 - ⑤ イノベーションが起こりやすい融合分野の戦略プロポーザル [福田]
 - ⑥ 海外動向調査:米国競争力強化に向けた取り組み [高杉]
 - (6) 自己評価・点検委員会の取り組み [井上]
4. 閉会

[資料]

- 資料1. 研究開発戦略センター アドバイザー委員会 名簿
- 資料2. 研究開発戦略センターの活動と成果説明資料(発表スライドのコピー)
- 資料3. 研究開発戦略センター 各グループの活動状況説明資料
- 資料4. 研究開発戦略センターの活動と成果について(データ集)

[議事内容]

1. 委員長の選出

委員の互選により、委員長として末松委員を選出した。

2. 議事録の取扱

出席者に事前に内容を確認の上、ホームページ等により公開することが了承された。

3. 自由討議

センターの活動と成果について、資料に沿ってセンターから説明を行った後、質疑と意見交換を行い、最後に総括として委員全員から意見をいただいた。

委員の意見は、全般的にセンターの活動と成果を支持するとともに期待をよせるものであり、更に改善するためのアドバイス、コメントをいただいた。以下、委員の主な意見とそれに対するセンターの意見及び対応を示す。

※以下、内は委員の意見、→以降は委員の意見についてのセンターの見解を表す。

1) センター全体について

- ・センターの役割と重要性は十分理解しているが、NISTEP や学術会議との連携がもっと図られると良いのではないかと。
- ・連携が重要ということに同感である。その際、それぞれの組織が各自のミッションに対して責任を持った上で連携することが重要である。

→センターでは、研究者コミュニティや政策立案者との連携を常に意識し、これまでも連携を行ってきたところである。今後も、センター及び各グループにおいて、それぞれの立場を認識した上での適切な連携を図りたい。

- ・各戦略プロポーザルについて、どこから情報を得たかが書いてないと、評価が難しい。研究者コミュニティとの意見交換をふまえてまとめているということがわかると、提言の価値が高くなるのではないかと。

→戦略プロポーザルの作成要領において、「検討の経緯」を付録として付けていたが、以後、本文中に盛り込むこととする。

- ・使われなかった提言も重要であったはず。提案したものの採択されずに終わっているということについて分析する必要があるのではないかと。
- ・センターの立案したものがどういう形で各省庁に取り上げられ実施されたか、というところまでフォローすべきではないかと。戦略立案全体において、どこまでやるかをはっきりさせてはどうか。

→各省庁での実施状況をフォローアップするのはかなり難しい作業と認識しているが、フォローアップやその分析の方法について、センター内に設置している自己評価・点検委員会で引き続き検討する。

- ・このセンターは誰に何の責任を持っているのかについて、いま一度、議論をすべきではないかと。そのような視点が無いと、短期的にやりやすい部分だけやり、長期的にはかえって種がなくなることが起きかねない。

→最終的には成果が国民に還元されるよう、政策立案・実施者（府省関係者）や研究者コミュニティへ戦略提言をすることがセンターの責務と考えている。

- ・戦略を立てて推進することについて、世界各国が注目していると思う。センターの成果を常に公表していくことが良いのか、検討の余地がある。ある程度進んでから公表するという手もあるかもしれない。

→内規を制定し、プロポーザルの内容により一定期間非公開にできることとしている。公開/非公開の判断に十分留意し、ルールに沿って運用する。技術シーズの重要性は十分認識している。

- ・各分野で作成している俯瞰図については、いずれも二次元であるが、三次元的、さらには時間計画とともに四次元的に作成することも重要ではないか。
- ・戦略立案にあたっては、弱いところを補完するのはむしろ後にして、日本の強いところをもっと強くすることを優先してほしい。
- ・研究者、研究開発をしている人に向けた提言はもちろん重要であるが、産業界に対してどういう改革をしてもらいたいのか、利益を得る以上に何を求めているのか、調査して伝える機能が必要ではないか。
- ・女性の視点、生活の視点を入れてもらいたい。既存の体系でないところからイノベーションは生まれるもので、女性の力を入れてほしい。
- ・先行する分野を大いに強化することを考えるなら、かなり衰退している分野をどうするかについての検討も必要ではないか。
- ・日本の場合、要素技術は海外に引けをとらないが、全体を組み上げていくということに対する取り組みが少なく、結果としてものが社会に出にくいのではないか。
- ・個々のテーマについては、もっと具体的なチャレンジで何を変革のベースにすべきかというところまで掘り下げ、価値を高めてほしい。

→以上の視点については、センターの活動を進めるにあたって、また作成するプロポーザルの内容に応じて考慮しているところであるが、今後とも十分留意する。

- ・新しい分野をどうして大学が育成できないかについて、①新分野は人材がいない、②大学全体として人員削減の大きな流れがある、という背景がある。政策提言にあたり、人材育成についても、文部科学省に近いところにいるセンターにも期待したい
- ・大学の履修でも、できれば2つ以上、別の分野をやるといいと思っている。それを進めるのもセンターの役目ではないか。

→研究のための人材育成は、必要に応じて研究開発の推進方法の中で言及する。また、人材育成についてはナショナルイノベーションエコシステム (NIES) の重要な要素の一つとして抽出しており、今後 NIES 全体の検討の中でどのように取り組むか考えて行く予定である。

なお、一般的な教育については、現時点ではセンターで取り組むことは考えていない。

上記の他、委員から次の発言があった。

- ・日本において、戦略立案できる機能がなかった。そのような状況にあって、将来を見据えて戦略立案をしようとしているセンターには期待している。戦略立案にあたっては、テーマを決定するプロセス、人材の結集、実行体制への移行がポイントである。
- ・例えば医療機器は外国製品が優勢だが、日本は要素技術では引けをとらない。うまく組み合わせる新しい価値を生み出す発想が欠けているのではないか。社会につなげていくには価値観の転換が必要だが、これは相当大変なことであり、リードしていくためには中核が必要である。その中核となるのはこのセンターではないかと期待している。

→JST としては、センターに学問的な中立性を重んじてもらい、良いアウトプットを出してほしいと考えている。ブランドイメージをつくって信頼性を高め、各方面に提言を取り入れてもらうというところまで 10 年ぐらいかけて取り組みたいところ。JST で推進できる範囲には限界があるので、多方面に働きか

けたい。また、センターは JST の中にあるが、実態としてオールジャパンで活躍してほしいと思っている。もちろん、ミニマムミッションは JST のための戦略立案であり、事業部門においても、センターの提案をふまえ、設定したゴールに向けてマネジメントを強化して研究を推進するプロジェクトの取り組みを開始した。大学の基礎研究と企業における研究の中間が欠けているという指摘に対する取り組みの 1 つともいえる。

2) ナショナルイノベーションエコシステム (NIES) について

- ・新しい分野の研究、知の創造にとどまらず、イノベーションにつながるからこそ、産業界として新しい分野の人材の育成に魅力を感じる。人材育成は重要だが、“人材育成のための人材育成”ではダメである。
- ・人材育成については、NIES の一部として検討するのが良いのではないかと。

→NIES の重要な要素の一つとして人材の問題を抽出している。今後 NIES 全体の検討の中で本問題についてご指摘の点に十分留意した上で、どのように取り組むか考えていく。

- ・イノベーションの現実の事例にはいろいろある。あまり特定の事例に限ってモデル化すると、ミスリードになる可能性がある。複数個 (3~4 程度) の流れがあった方が良い。また、モデル化にあたっては、現実の例に当てはめた方が良い。

→NIES での検討では発表以外の事例も入れてモデル化の検討を行ったところであるが、複数の事例で検討すべき点のご指摘は基本事項として重要であり、今後とも十分留意していきたい。

- ・日本が弱いのは、知の創造をイノベーションの種につなげていく部分であり、そういう役割をセンター中心に JST が担っていけると良い。「場」の議論と一緒にぜひ考えてほしい。

→NIES の重要な要素の一つとして資金配分機関の役割を抽出しており、NIES 全体の検討の中でどのように取り組むか考える予定。センターへの期待に添えるよう最大限努力したい。

- ・イノベーションは社会につなげることが重要。イノベーションの実現に向けては、推進する分野だけでなく、推進するための仕組みをセットで提案すべきである。

→ご指摘の点はこれまでの作業の中でも十分留意してきたが、今後の政策提言にあたって積極的に取り組む。

- ・Step&Loop モデルで日本の強さを見極め、人材の蓄積を背景に、力を入れて大いにやってほしい。
- ・「場」の要素については、まだキーワード的に列挙されているだけなので、この中で最も有効なものは何か示してほしい。
- ・成功事例に倣って考える手法が多いが、失敗した例や失敗が結果的に成功につながった例もあるはず。失敗例から学ぶことも重要ではないか。
- ・人材の流動によって大きな発展をした事例があると思うので、掘り下げて議論してほしい。本人が意図しない力が働いて、イノベティブなものをつくる場合がある。

→上記の点に十分留意して今後の政策提言に向けての作業に取り組んでいきたい。

3) ICR について

- ・ICR については、ぜひ進めてほしい。
- ・研究開発を早めることが重要であるのは同感だが、そのためには最小限のリスクは認められることが必要ではないか。

- ・ ICR は、国民にとって是非に思うところ。実際に社会につなげるためには、臨床医のインセンティブ、使命感が必要であり、マネージャーの存在が重要である。
- ・ ICR については、法の改正がないと進まない。センターでこれを推進するにあたっては、ネックとなる点、乗り越えるべき山ともいうべき点を明確にした方が良い。
- ・ ICR について、患者の視点からすれば、安全性がどうかということが最も重要である。リスクに対し補償する仕組みが必要ではないか。
- ・ “いままでこのぐらいだったのがこうなる”という具体的な数字を出した方が良い。例えば、欧米では審査に〇年かかっており、日本でも同じレベルに持っていくという説明があると、非常にわかりやすいのではないか。

→今後の ICR の検討、提言に際しては、指摘事項に十分留意したい。

4. 第2回アドバイザー委員会について

第2回アドバイザー委員会は平成19年6月頃に開催することが了承された。

また、第2回委員会では、センターから評価項目を挙げ、それに沿って委員から評価いただく予定であることを説明し、了承された。

以上